科学と社会委員会（第２６期・第 １ 回）議事要旨

１．日時：令和５年 12 月 19 日（火）15:00～16:06

２．会場：オンライン会議

３．出席者：（敬称略）８名
磯博康、大久保規子、奥野恭史、狩野光伸、北川尚美、五斗進、多々納裕一、中村征樹
（事務局：根来、若尾、遠藤）

４．議事
(1) 役員の選出について
磯博康委員長より、副委員長に中村征樹委員、幹事に五斗進委員、多々納裕一委員が指名され、承認された。

(2) 分科会について
前期に引き続き、「年次報告検討分科会」を設置すること及び同分科会委員名簿につき、承認された。
その他、第 26 期において委員会に設置する分科会につき、議論を行った。各委員からの主な意見は以下のとおりであった。
○学術会議と政府または産業界とのコミュニケーションはどのようなチャンネルを用いて行うのか。広報とは異なる双方向性のコミュニケーションをする分科会が必要ではないか。この委員会において担うことも含めて検討をすべき。
○市民との交流について、サイエンスカフェは根付いてきており、ほかの形の交流を模索する分科会があってもよいのではないか。
○広報の面では、ＳＳＨ（スーパーサイエンスハイスクール）や大学の教養学部等へ情報提供し、学生等への教育材料としてもらう活動などを検討している。こうした広報の動きと連携しながら政府・産業界とどのように向き合っていくのかを考える必要がある。
○国会議員に対して直接的な意見を伝えていく必要がある場合に、この委員会または分科会が取りまとめて行っていくという考え方もあるのではないか。
○学術会議が公表した意思の表出が社会にきちんと理解されて社会実装に繋がっていくためのフォローアップが今までは弱かったと感じており、こ

のあたりを戦略的に行っていくことが必要ではないか。

○学術会議の意思の表出は社会のニーズに応えていないという声があり、アジェンダの決定段階で多様な意見をどのように聴くことができるかということも検討課題になる。

○産業界は、学術会議とのより密接な連携を求めているが、どのようなルールの下でどこまでそれが可能なのかという基準を検討していくことも必要となる。

○社会との繋がりを考えていく場合、学術会議外のステークホルダーに入ってもらって議論を行う場を設けるのもよいのではないか。

(3) その他

「サイエンスカフェに関する今後の対応について」（平成 24 年第 166 回幹事会決定）を改正し、サイエンスカフェ開催時の届け出先を科学と社会委員会へ変更することにつき、承認された。

そのほか、次回以降の開催日程の調整及び諸注意について、事務局より周知がなされた。

以上